2026年11月13日

各　位

会社名　　神戸天然物化学株式会社
代表者名　　代表取締役社長　真岡宅哉
（コード番号　6568　東証グロース）
問合せ先　　専務取締役 管理本部長　閨正博
（TEL. 078-955-9900）

2027年3月期　第2四半期決算において想定される質疑応答集

当社の2027年3月期第2四半期決算について、投資家の皆様から寄せられると想定されるご質問と回答をまとめましたので、下記のとおりお知らせいたします。本開示は、皆様のご理解を一層深めることを目的としております。

記

Q1　2Q累計で増収増益となり、売上高の通期進捗率も44.7%に達しています。一方で、下期偏重の収益構造は変わらないとのことですが、上期の売上水準が上昇した結果と理解してよいでしょうか。

A1　今回の上期業績は、下期偏重の収益構造が大きく変化したことによるものではなく、案件の積み上がりなどを背景に、上期の売上水準が上昇したことが主因です。当社では引き続き、医薬分野を中心に下期、とりわけ第4四半期に売上が偏重する傾向を見込んでおります。

この上期の売り上げ水準上昇については、新棟の稼働や良好な外部環境に加え、営業活動の強化を進めており、これらを通じた受注・生産体制の強化が、今回の業績につながったと考えております。

Q2　下期は前年同期比で減収減益を見込んでいますが、上期の受注・売上状況を踏まえても通期見通しを据え置く理由は何でしょうか。

A2　通期業績見通しは、上期の進捗や下期の見通しに加え、原材料価格、調達環境、顧客希望による期ズレに関する不確実性を勘案し、従来の見通しを据え置いております。

Q3　ホルムズ海峡問題を含む原材料の調達環境や価格転嫁の状況は 2Q 時点でどのように変化しており、コスト・調達リスクを通期見通しにどの程度織り込んでいますか。

A3　ホルムズ海峡問題を巡る調達環境は、1Q 資料公表時点と比べて全体として安定化に向かっていますが、引き続き不透明な状況と認識しています。現時点で調達トラブル等は確認していませんが、慎重な前提を置いています。

Q4　開発ステージの売上が伸長し、全社売上に占める構成比も 27%に上昇しました。開発案件を量産案件へつなげることが成長の重要なステップと考えられますが、開発ステージ着手から量産ステージの売上寄与に至るまで、一般的にどの程度の期間を想定すればよいでしょうか。

A4　開発案件から量産への移行期間は、顧客の評価・承認プロセスや製品特性、設備・品質要件などによって異なるため、一律には示せません。一般に、機能材料は、開発から量産への移行時間が比較的短い一方、医薬品が長く、量産への移行に長期間を要する場合もあります。

開発ステージの売上が伸長していることは、将来の量産案件につながる可能性のある案件が積み上がっていることを示しており、当社のビジネスサイクルにおいても望ましい状況と認識しています。開発案件を着実に量産化へつなげられるよう、顧客との関係強化や案件の立ち上げに取り組んでまいります。

Q5　上期の新規受注は過去最高を更新し、受注残も高水準となっています。大型案件の受注が一巡した後も、受注水準の底上げは続くと見ていますか。また、受注残の増加が売上に反映される時期をどのように考えていますか。

A5　上期の新規受注は約 68 億円と過去最高を更新しました。2Q は大型案件の受注が一巡し 1Q 比で減少したものの、半導体関連の引き合いや新棟稼働を背景とした需要は底堅く推移しております。当期売上予定の見込生産品目には、これから受注をいただく案件も含んでおり、3Q・4Q にかけても安定した受注の積み上げを見込んでおります。

売上反映時期につきましては、個別案件の性質により異なるため一概には申し上げられませんが、一つの目安として『受注残リードタイム』を開示しております。現状の『受注残リードタイム』は前年同期と同水準となっており、来期以降へ売上計上される割合についても、前年並みを見込んでおります。

※　当資料に記載されている内容は、いくつかの前提に基づいたものであり、将来の計画数値や施策の実現を確約したり保証したりするものではありません。

以　上